

『総索引 1946-1996』の作成による「思想の科学」への影響 —総索引というメディアに焦点を当てて—

那波 泰輔

日本語要約

本稿は、『総索引 1946-1996』を対象に、「思想の科学」がみずからの戦後思想を捉えようとした意味を分析したものである。社会運動史の観点から、『総索引 1946-1996』というメディアを扱うことで、「思想の科学」の運動を考察した。80年代は『思想の科学』と思想の科学研究会が距離を置きつつあった時期であり、思想の科学研究会は研究会としての独自性を模索していった。90年代の『総索引 1946-1996』は平等に名前を羅列することでそこに関わった人びとを掬い上げていく機能を持ち、また『思想の科学』の歴史を思想の科学研究会が参照できるようになることで、『思想の科学』と思想の科学研究会を再度結びつけていくことになった。そして、『総索引 1946-1996』から『源流』、『ダイジェスト』、『読む人・書く人・編集する人』が作成されていき、戦後思想を捉える運動が生起していった。

キーワード：「思想の科学」、戦後思想、メディア

I はじめに

1 問題意識

現代という時代において、多くの政治的、経済的など多種多様な問題が生じている。そうした問題の解決は欠かすことのできないことではあるが、その前段階として社会にそのような問題があることを気づかせることも必要となる。そうした意味で、雑誌は現在生じている事象を取り上げることで、社会に問題を提起するメディアである。現在に生きる人びとは、過去の雑誌から人びとがどのように社会問題に取り組んできたのかを知ることができ、現代の社会問題の解決の示唆を得ることもできる。戦後日本において、大衆の文化や、社会問題など、さまざまなテーマを取り扱ってきたメディアとして、雑誌『思想の科学』をあげることができる。『思想の科学』は1946年に鶴見俊輔などの知識人を中心に創刊された雑誌であり、『思想の科学』を起点として、転向研

究などで知られる思想の科学研究会も誕生しており、戦後思想を捉えるうえでも重要な雑誌である。『思想の科学』の特集では、1965年6月『日本の村』、1966年2月『日記の思想』、1969年6月『われわれにとっての朝鮮』、1969年7月『女の自立とは何か』、1971年8月『三里塚闘争と農民の伝統』など、多種多様なテーマや問題を取りあげていた。

『思想の科学』の特集を知ることができるのは、1999年刊行の『思想の科学 総索引——1946-1996』（以下、『総索引 1946-1996』）の存在が大きいだろう。索引とは、雑誌や書籍において、人物名や事項によって、読者に関心のあるページを指し示すものである。総索引は、それまで刊行された雑誌の全巻において、人物名や事項から関心のある号や巻の雑誌にあたることのできるものである。索引の歴史を論じた Duncan は、索引は「空間的な関係」を示すものの、「ある種の地図」であり、素材を整理・要約することで、「別の新しいものを作り上げるという抽象化」をおこなうものでもあると指摘している [Duncan, 2021=2023: 11-12]。

Duncan の指摘は、『思想の科学』と思想の科学研究会の取り組みをみるうえでも重要である。なぜなら、『総索引 1946-1996』というメディアによって、どんなものが生み出されていったのかを明らかにすることができるからである。『思想の科学』は1996年に休刊しており、その休刊にともなって、『総索引 1946-1996』は企画されたものであった。こうした『思想の科学』の休刊という出来事によって、思想の科学研究会の活動も終了したと思われる。しかし、思想の科学研究会は現在も継続しており、この継続には『総索引 1946-1996』の作成過程や、その作成後に生成されたものも関係している。もし、『総索引 1946-1996』の作成の意味を解明しないならば、『総索引 1946-1996』の作成が休刊という事象に還元されてしまい、現在まで思想の科学研究会を継続させてきた人びとの運動や営為を捨棄されてしまう可能性がある。

また、社会運動史の観点からも『総索引 1946-1996』は重要である。近年の社会運動史では社会運動とメディアの関係も重視されており、「メディア」とは「モノでも人でもあり、運動の帰結でありつつ動因」でもあり、「その物質性が人びとの関係性を生み出す」ことが指摘されている [大野・小杉・松井 2021: 7]。本稿はこの社会運動史のアプローチを採用する。『総索引 1946-1996』を対象とすることは、それがいかなる人びとの関係性を生み出したのかを明らかにすることでもある。

本稿では、雑誌や研究会を含めた運動を捉えるために、思想の科学研究の先行研究でも採用されている定義を採用する。『思想の科学』のように二重鍵括弧で囲んでいるものは雑誌を指し、「思想の科学」のように一重鍵括弧で囲ん

でいるものは、雑誌や思想の科学研究会を含めた思想や活動として定義する。

戦後思想史では『思想の科学』や思想の科学研究会は鶴見俊輔などの知識人を代表して論じられることが多かったが、近年の「思想の科学」の先行研究は、戦後思想史において知識人を中心に論じられていることから距離をとり、民衆や市民などのさまざまな主体の活動に焦点をあてたものがある。

和田悠 (2005) は鶴見俊輔に焦点を当てつつ、戦後啓蒙の視点から 1950 年代の「思想の科学」の大衆化の過程を明らかにしていった。考察されることが少なかった初期の「思想の科学」がどのように大衆化していったのかを明らかにした点で優れている。

横尾夏織 (2014) は創刊初期から 1980 年代ごろまでの「思想の科学」を、知識人だけではなく多様な主体の運動を明らかにした。「思想の科学」は特定の時期が論じられることが多かったが、それを通史的に分析したことは重要であった。

ただ、どちらも時期としては 1950 年代や 80 年代ごろまでが対象であり、本稿が目的としている社会運動とメディアの関連における「思想の科学」はそこまで意識されていない。

そのなかで社会運動史の観点から「思想の科学」を分析したのが道場親信 (2010) である。道場は、「思想の科学」が「自己言及の多い思想運動」であり、「自己言及によって自らのあり方を再確認・再定義してきたという面」も持っているとし、その「自己言及の一つの集大成」が、『思想の科学』休刊にあたって作られた三部作『総索引 1946-1996』、『源流から未来へ——『思想の科学』五十年』（以下、『源流』）、『『思想の科学』ダイジェスト——1946-1996』（以下、『ダイジェスト』）であるとする〔道場 2010:134〕。しかし、この三部作の作業は「『思想の科学』の軌跡の集成」ではあっても「『思想の科学』の集成ではない」とし、なぜなら「『思想の科学』の運動を作り出してきた数々の共同研究やサークル、地方グループの軌跡」は、三部作に掲載されているが、それ自体が主題化されているわけではないからだという〔道場 2010:134〕。

道場は三部作を「『思想の科学』の軌跡の集成」ではあり「『思想の科学』の集成ではない」とするが、三部作の内容のみに着目してしまい、三部作を通して人びとがどのようにつながり戦後思想を捉えようとしたのか、三部作がいかにより作成されていったのかという視点が捨象されてしまっている。三部作の内容自体は『思想の科学』に関する事柄ではあるが、三部作というメディアが作られる過程には思想の科学研究会の会員の関わりがあった。三部作の作成作業は、『思想の科学』と思想の科学研究会の関わりであり、それは「思想の科学」の集成でもあった。つまり、メディアの「内容」だけに着目するのではなく、「形式」にも着目する必要がある。とくに、三部作を作る基盤となった『総索引 1946-

1996』の作成過程を分析することは、「思想の科学」の集成を明らかにしていくことにもなる。

2 調査概要

(1)対象時期

『思想の科学』の時期区分は8つに分かれている〔本間 2019:35-41〕。第1次は1946年5月～1951年4月(先駆社)、第2次は1953年1月～1954年5月(『芽』(建民社))、第3次は1954年5月～1955年4月(講談社)、第4次は1959年1月～1961年12月(中央公論社)、第5次は1962年4月～1972年3月(思想の科学社)、第6次は1972年4月～1981年3月(思想の科学社)、第7次は1981年4月～1992年12月(思想の科学社)、第8次は1993年1・2月～1996年5月(思想の科学社)となっている。本稿では、『総索引』の作成時期にあたるおもに第5次から第8次までを対象時期とする。

(2)研究方法とデータ

第一に、『総索引 1946-1996』作成の意味や影響を分析するためにそれ以前に作成された総索引の『『思想の科学』総索引(1946～1966)』(以下、『総索引 1946-1966』)、『『思想の科学』総索引(1946～1972.3)』(以下、『総索引 1946-1972』)を取りあげる。

第二に、『総索引 1946-1996』の作成により、なにがどのように生み出されていったのかをみるために、『総索引 1946-1996』を含めて三部作と形容される『源流』、『ダイジェスト』を扱う。『源流』は2005年、『ダイジェスト』は2009年に刊行され、この三部作の出版記念シンポジウムをまとめた『読む人・書く人・編集する人——『思想の科学』五〇年と、それから』(以下、『読む人・書く人・編集する人』)も2010年に刊行されており、これらの資料と『総索引 1946-1996』の関係を検討する。

第三に、『思想の科学』と思想の科学研究会の関連性を捉えるために、『思想の科学』、『思想の科学会報』を主な資料とする。

第四に、『総索引 1946-1996』の作成過程を分析するために、『総索引 1946-1996』の作成に関わった人物の著作や文献を調査した。『総索引 1946-1996』の作成の中心を担ったのは安田常雄であり、彼の著作や論文、記事を扱った。また、『総索引 1946-1996』作成の意図には、1980年代の「民間学」の議論や地方集会への安田の思想も反映されているため、80年代の「民間学」の議論や地方集会の資料も対象とした。

第五に、『総索引 1946-1996』の作成は、安田だけではなく、さまざまな人

びとに関わって作られたものであるため、索引作りに関わった人物にもインタビュー調査を実施した。また、その後に作成された『源流』がどのように作られていったのかをみるために、『源流』の作成に携わった人物にもインタビュー調査も実施した。

第六に、鶴見俊輔の思想について考察するため、鶴見に関わった人物が集っている会などにフィールドワークをおこなった。

以上をふまえて、本稿は『総索引 1946-1996』の作成により、なにが新たに生み出され、それによりどう「思想の科学」が戦後思想を捉えようとしていたのかを検討するものである。

Ⅱでは60、70年代に作成された『総索引』を対象にすることで当時どのような視点から『総索引』が作成されていたのかを確認し、Ⅲでは80年代における『思想の科学』と思想の科学研究会の乖離をみとうえて、80年代の思想の科学研究会の方向性に影響を与え、90年代の『総索引 1946-1996』の作成の中心を担った安田常雄の思想を考察する。Ⅳでは『総索引 1946-1996』の作成はどのように意図され、またそれによってなにが生成されていったのかを明らかにし、最後に結論となる。

Ⅱ 1960・70年代の『総索引』

1990年代の『総索引 1946-1996』の意味を確認するために、60、70年代に作成された1967年の『総索引 1946-1966』、1972年の『総索引 1946-1972』について検討する。

1 『思想の科学』と自主刊行

まず、当時の「思想の科学」の状況について確認していく。この時期で重要なこととして、1962年4月から始まった第5次『思想の科学』は、思想の科学社によって自主刊行されたことである。自主刊行前の第4次において思想の科学研究会と中央公論社が袂を分かつことになる天皇制問題特集号廃棄事件が起こる¹⁾。編集方針も変わりつつあった中央公論社が、印刷・製本までされていた『思想の科学』の「天皇制問題特集号」を廃棄したのである〔横尾 2014: 21〕。これを受けて、思想の科学研究会は1962年に有限会社「思想の科学社」を設立し、『思想の科学』を自主刊行していくことになった。

自主刊行当初の『思想の科学』は、思想の科学研究会の機関誌として想定されていた。『思想の科学』の自主刊行に携わった佐藤忠男は「雑誌は会の機関誌としての性格をより強くもつこと」になるとし、思想の科学研究会は「いくつかの研究サークルの連合体という面」を持っているので「それらのサークルでの研究

成果の発表機関として雑誌があるのが望ましい」と述べている〔佐藤 1962:94〕。

しかし、1966 年 5 月の「思想の科学創刊二〇周年記念シンポジウム」では、機関誌として『思想の科学』の立ち位置が疑問視される。『思想の科学』は、「社会的な公器」としての雑誌であるために、思想の科学研究会と『思想の科学』の分離が提唱もされた〔思想の科学研究会 1966:142〕。

ここで着目すべきことは、『思想の科学』が「機関誌」か「社会的な公器」かということではなく、こうした議論を引き起こす状況が『総索引 1946-1966』の作成を可能にした一因という点である。つまり、『思想の科学』が創刊から 20 年、自主刊行から 5 年近く経過し、『思想の科学』の歴史を振り返ることの重要性が認識されてきたのである。

2 1960・70 年代の『総索引 1946-1966』

まず、1960・70 年代の総索引群を作成した名古屋グループの特徴について確認したい。1960・70 年代の総索引は、名古屋グループの鈴木正・稲葉誠也らが中心となって作成された。名古屋グループとは、思想の科学研究会の地方グループ・読者の会にあたる〔道場 2010:138-139〕。

名古屋グループの誕生は、『思想の科学』が自主刊行になってから半年後の 1962 年の秋であり、鈴木正が中心になって継続された地方グループであった〔鈴木 1967:119〕。名古屋グループは、『思想の科学』が自主刊行となり、雑誌を潰さないために各地で読者の会を作って支えてほしいという編集部の呼びかけに応じて作られたものであった〔鈴木 1972a:104〕。そのなかで、1965 年 9 月に『思想の科学名古屋グループ会報』が創刊されてもいる。

次に、名古屋グループが『総索引 1946-1966』を作成した経緯としては、司書の稲葉誠也が議論のあとのアフターサービスとして『思想の科学』の主要な記事を整理したものや、名古屋市民学校²⁾の講師を紹介するための著者目録を提供していたものが好評を博したことから、一層の拡充を望む声により作成されたことにあった〔伊藤 1972:147〕。稲葉は思想の科学社から了承され作成を開始したのである。

このように作成された『総索引 1946-1966』は、上記で確認したように、『思想の科学』の方向性を再確認するものでもあった。『総索引 1946-1966』の作成は、『思想の科学』が自主刊行になってから 5 年近く経ち、『思想の科学』の方向性について議論がなされていた時期であった。実際に『総索引 1946-1966』では、序文として鈴木正の「『思想の科学』の初心について」が掲載されており、『思想の科学』の方向性を再考するものとしても索引が作成されていたことがわかる。

3 1970年代の『総索引 1946-1972』

『総索引 1946-1972』は『総索引 1946-1966』を多少の加筆・修正したものである。

まず、『総索引 1946-1972』が作成された状況についてみていきたい。この総索引の発行日は1972年7月10日となっており、第5次『思想の科学』（1972年3月）の終了、第6次『思想の科学』の出発（1972年4月）にともなって刊行されている。『総索引 1946-1972』は自主刊行が始まった第5次までの歴史を振り返ることができるものとして刊行されたのである。実際に中表紙には「自主刊行10周年記念出版」と記載されており、大野力「自主刊行・10年の歩み」という文章も掲載されている。

では、『総索引 1946-1972』は索引数以外でどのような点が変わったのだろうか。それは評論家の深作光貞の『総索引 1946-1966』の書評（1968年）へ応答した点である。

深作は、『総索引 1946-1966』を褒めながらも、『思想の科学』的眼が件名の分類にもっと強く働いていないことを批判している。さらに、『総索引 1946-1966』から読み取れることとして、鶴見俊輔のパーソナリティを深作はあげており、さらに、鶴見俊輔のパーソナリティが『思想の科学』を形成しているとする。

この書評に対して、『総索引 1946-1966』の編者の鈴木はどう対応したのだろうか。深作の提言を受けて、鈴木はわずかばかりの改編をおこなったという（鈴木 1972b : 5）。鈴木があげたわずかばかりの改編になった理由として重要なことは、「鶴見俊輔の思考方法」の傾斜や解釈が批判を呼ぶ可能性があることである。鶴見俊輔という知識人はその知名度や影響力も大きく、また『思想の科学』を始めた一人であることから、「思想の科学」とは切っても切り離すことはできない。実際に深作も「鶴見俊輔のパーソナリティが『思想の科学』を形成している」と考えていた。ただ、鈴木が「鶴見俊輔的思考方法」の傾斜や解釈への危惧があったように、「鶴見俊輔的思考方法」を改編の際にそこまで採用しなかったことは、「思想の科学」を鶴見俊輔という知識人に収斂させないことでもあった。

1960・70年代の総索引の特徴としては、自主刊行から数年経過し「思想の科学」の方向性を確認するものであったこと、「思想の科学」の地方グループからの試みであったことをあげることができる。

Ⅲ 「民間学」と地方集会

この章では、まず1980年代の『思想の科学』と思想の科学研究会の乖離を確認していく。80年代の思想の科学研究会の方向性に影響を与えた人物として、90年代に思想の科学研究会の会長となる安田常雄をあげることができる。

そのなかで 90 年代の『総索引 1946-1996』の作成を指揮した安田の実践を考えるうえで重要となる、思想の科学研究会での「民間学」に関する議論を参照したうえで、思想の科学研究会の特徴的な活動である地方集会に着目する。

1 『思想の科学』と思想の科学研究会の距離

1980 年代は『思想の科学』と思想の科学研究会が距離を置いていった時期である。思想の科学社の実務が上手くいけなくなり、『思想の科学』の休刊が検討されたのである〔本間 2019: 40〕。

『思想の科学』が思想の科学研究会の「機関誌」か「社会的な公器」かという議論もあったように、通常の『思想の科学』と、思想の科学研究会の発表の場である『別冊・思想の科学』が作られていたことも、80 年代の雑誌と会の乖離に影響を少なからず与えていた。1969 年 10 月に『別冊・思想の科学』が正式に創刊され、「創刊のことば」では、『別冊・思想の科学』を、「思想の科学研究会における研究成果の発表の場」とすることが掲げられている。創刊にいたった理由として、『思想の科学』は「ジャーナリズム機能」を持ったため、「研究成果の発表機関という点」で「やむをえざる制約を感じる」ことからであった〔思想の科学研究会 [1969] 1999: 72〕。すでに方向性の差異が生じていたために、80 年代ではそれがより問題となって顕在化したのである。

思想の科学研究会は雑誌とは別の流れで活動をしていくようになった〔本間 2019: 40-41〕。そのなかで、思想の科学研究会は自身の方向性について考える必要が出てきたのである。

2 思想の科学研究会と「民間学」

1980 年代の思想の科学研究会の方向性に関する議論では、1980 年 3 月の増大号のテーマ「80 年代へ向けての思想の科学」にその端緒をみることができる³⁾。座談会「思想の科学の運動の提示したもの、提示するもの」では、「思想の科学的と言われるものが何であったのか」を考えることで、そこから「80 年代へ向けての思想の科学」が「80 年代の思想状況に何を呈示しうるのか」がわかるという趣旨から「思想の科学」の方向性について議論がなされている〔鶴見ほか 1980: 5〕。80 年代に事務局長に就任する後藤宏行は「思想の科学的なものが何であったのか」を考える場合に、「民間アカデミズム」ということがいくつかのころから言われ出していると指摘している〔鶴見ほか 1980: 5〕。

このように、1980 年代において、民間アカデミズムに関する議論は、思想の科学研究会の立ち位置や方向性に関わる議論でもあったことがわかる。『思想の科学』では 1985 年 9 月号で「日本民間学の現在」が特集されている。

さらに、1986年4月には「民間学」がテーマで思想の科学研究会の公開シンポジウム「日本民間学の可能性」が開催されている。これは、鹿野政直『近代日本の民間学』（1983年）によって提唱された「民間学」を軸に開かれたものであった。鹿野も登壇し「民間学」に関する議論が思想の科学研究会でおこなわれたのである。

そして、この公開シンポジウムの内容は翌年の1987年に『思想の科学』の別冊として刊行されている。別冊となったことからわかるように、「民間学」が思想の科学研究会の問題としてより意識されていたことがわかるだろう。実際に、編集後記では、「『民間学』という言葉が、『思想の科学』の四十年の前におかれたときに、それはひとつの象徴のように機能し、一人ひとりの内部に生れた酵母がゆっくりとふくらんで、この別冊の構成をつくった」[安田 1987b: 132]と書かれており、「民間学」から「思想の科学」を捉え返す意図があった。

注目すべきことは、のちに『総索引 1946-1996』の作成の中心を担う安田常雄が、「民間学」の別冊を編集していることである。編集の依頼が来て「請負みみたいな形の雇われ編集者」であったと安田は述べているが[安田 2010b: 126]、安田が引き受けて編集した『思想の科学』の特集であったことを考えれば、安田にとって「民間学」の特集が重要な位置を占めていたことがわかる。特集には鹿野の公開シンポジウムの報告内容を加筆した論考も掲載されているが、その内容は、1985年に『思想の科学会報』に掲載された安田の「『民間学』の読み解きのかなたに」の批判に応えたものであった。

では、安田は鹿野の「民間学」概念への批判のなかで、「民間学」をどのように捉えていったのかだろうか。

まず、鹿野の「民間学」の概念について確認したい。鹿野が「民間学」を提唱した意図としては、官学という「権威性」への批判等があった⁴⁾。『近代日本の民間学』において、鹿野は柳田国男・伊波普猷などを選ぶことで、「これらの“英雄”たちの足跡を特徴づけること」によって、「民間学」の「塑像を明らかにしてゆくこと」を目指したのであった[鹿野 1983: 55]。鹿野は代表的な人物を取りあげることで、「民間学」を描こうとしたのであった。

これを受けて、安田は「戦後日本の民間学」は記録・運動・論理の3つに分けることができるとし、この3つの共通の土台は、「戦後の民衆の自己表現の歴史」である、「いきること」・「書くこと」・「運動すること」があると述べる[安田 1985: 13]。このなかで「運動としての民間学」について、安田は、「民間学」を「ひとつの運動が一人の創始者の名前によってのみ記録されることを避けるための方法」であり、「形成された「学」の背後には民衆のたくさんの努力が蓄積されていること」を強調するのである[安田 1985: 14-15]。これは鹿野が代

表的な人物を取りあげ、そこから「民間学」を描いていったことへの批判でもあるだろう。安田が創始者などに思想や運動を代表させることを批判し、その後ろにある人びとの営為を重視していることは注目すべきことだろう。

3 1980年代の地方集会

1980年代から90年代にかけての地方集会は、『思想の科学会報』の復刻に関して京都での拡大評議員会に始まりを見ることができる。

『思想の科学会報』の復刻を進めたのは、1982年に思想の科学研究会会長に就任した渋谷定輔であった。渋谷は『思想の科学会報』を復刻した理由について、『思想の科学会報』からは「思想の科学」の「多様性の中の共通性」が感じられたことに言及している[渋谷 1982:4-5]。渋谷は『思想の科学会報』を復刻することで、「思想の科学」の「多様性の中の共通性」をみていこうとしたのである。これは「思想の科学」で生起されてきた戦後思想をみようとしたことであった。『思想の科学会報』を復刻は、思想の科学研究会が「思想の科学」の戦後思想を考える素地を与えたのである。

『思想の科学会報』復刻はどのように地方集会へと向かっていったのだろうか。東京以外で思想の科学研究会の評議員会の開催など提案されたことで、『思想の科学会報』復刻版について考える評議員会が京都で開催された。『思想の科学会報』によって自身の戦後思想を振り返るにあたり、東京だけではない地方の人びとも含めて戦後思想を考えていこうとしたのである。このように、当初は「拡大評議員会」としてスタートされ、思想の科学研究会の会員が多く存在しており、開催を希望する人がいる地域から開かれていった[安田 1990:45]。「拡大評議会」が地方集会へ変容していった理由を、安田は、地方集会が地方の問題について語り合う場になり、それによって、思想の科学研究会の歴史が検証される場にもなっていった可能性を指摘している[安田 1990:45]。

地方集会という場がさまざまな人びとを結びつけるものであり、「思想の科学」の活動の歴史を考える場にもなっていた。安田はこの時期の地方集会を「一九八〇～九〇年代における思想の科学の「つきあい集団」としてのふり幅がほぼ表現されている」とし、「雑誌の表面からは見えにくいこの集団の「結衆」の構造を表している」とする[安田 2006:14]。地方集会は、安田が想定した「民間学」である「形成された「学」の背後には民衆のたくさんの努力が蓄積されていること」を浮かび上がらせるものでもあったのである。安田における、思想や運動を創始者に代表させることへの批判的な意識は、1980年代の地方集会に表れており、この取り組みが『総索引 1946-1996』にも繋がっていったのである。

Ⅳ 『総索引 1946-1996』の作成過程と生成

この章では、『総索引 1946-1996』がどのように作成されていき、『総索引 1946-1996』というメディアが成立したことで、「思想の科学」にどんな影響を与え、なにが生成されていったのかを分析する。

1 『戦後「啓蒙」思想の遺したもの』の刊行

『総索引 1946-1996』の作成前の重要な 1990 年代の活動として、『戦後「啓蒙」思想の遺したもの』（安田常雄・天野正子編、1992 年）の刊行をあげることができる。これは先駆社版『思想の科学』、『芽』の復刻の別巻であった。

この企画の狙いとしては、復刻とともに、別巻として「解説」や「解題」をつけることで、初期の「思想の科学」を中心としながらも、「『思想の科学』の四六年の歴史と現在」をあらためて見直すことであった〔安田 1992:243〕。

作業の視点は 3 つあり〔安田 1992:243〕、第一に「実証的」であることで、それは同時代の出典などにより根拠を明示しあとの「検証」を可能することでもあった。第二に思想の科学研究会の研究活動、いわば「一つの思想運動」として作業自体をすすめることである。第三に従来の「思想の科学」のイメージにとらわれずに、今日の問題意識から自由に読み直すことである。

この刊行は戦後思想を捉え直そうとするものでもあった。編者の安田常雄は、復刻版の「解説」を踏み台にして「新しい視点と想像力にもとづいた仕事が現れること」を願うと述べる〔安田 1992:244〕。なぜなら、それは、「『思想の科学』自体の多角的な思想的意味の再検討である」と同時に、「『戦後思想』そのものの捉え直しを意味」するからであった〔安田 1992:244〕。復刻などで「思想の科学」の歴史をまとめるという作業は、単にその内容を復刻させるだけではなく、そのなかでの作業やそこから生み出されるものが意識されており、それは「思想の科学」の戦後思想をどう捉えるのかということに関わっていたのである。

2 『思想の科学 1946-1996』の作成

『思想の科学』の総索引の作成の話が上がったのは 1993 年の春であった。この頃には『思想の科学』の「終刊」はほぼ決まっており、鶴見俊輔から 50 年の記録として総索引の作成の提案があったことがきっかけであった〔安田 1999:1〕。『総索引 1946-1972』の作業を受け継ぎながら 50 年間の全体を見通す作業が出発し、総索引作成のための作業グループとして索引の会が作られた〔安田 1999:1〕。索引の会には思想の科学研究会の会員から上原隆・児玉昭夫・古田佳之が参加し、会員外では大学院生の高原泉が参加し、編集実務は当時の『思想の科学』編集部の中島雅一が担当したのである〔安田 1999:1〕。

『総索引 1946-1996』はどのようなことを目的に作られたのだろうか。編者の安田常雄は、『総索引 1946-1996』の作成には2つの意味があったとし、ひとつは「[著者] [事項] 項目などの変遷をとおして戦後思想文化運動の記録」であり、もうひとつは「執筆者や話し手だけでなく、聞き手や記録をとった人、さし絵やイラストを描いた人、写真を撮った人、感想を寄せてくれた読者など、いわば思想運動としての「思想の科学」に関わったすべての人の記録」を目指したものであった[安田 2005:8]。

この『総索引 1946-1996』の取り組みは、「[思想の科学]という「つきあい集団」に集ったすべての人々の記録」を作ろうとしたことであった[安田 2006:8]。『総索引 1946-1996』はさまざまな人びととの関わりから「思想の科学」を描こうとしたのであり、それには編者の安田が1980年代に提起していた「ひとつの運動が一人の創始者の名前によってのみ記録されることを避けるための方法」という意識が表れていた[那波 2021b:57-58]。80年代には、「思想の科学」は地方集会によって、「形成された「学」の背後」にある「民衆のたくさんの努力」を現前化させていった。そして、90年代では、『総索引 1946-1996』というメディアにおいて、そうした人びとの記録を残すことで、「ひとつの運動が一人の創始者の名前によってのみ記録されることを避けるための方法」が実践されていったのである。

『総索引 1946-1996』の「ひとつの運動が一人の創始者の名前によってのみ記録されることを避けるための方法」の実践は、総索引というメディアの「形式」も関わっている。総索引は、有名・無名に関わらず、その名前や事項を羅列することによって、平等に扱う機能を持つ。『総索引 1946-1996』で並べられた人びとは、「論文・エッセイ」などの書き手だけではなく、「司会・訳者・聞き手・記録者・絵の作者など」も含まれている[思想の科学研究会・索引の会 1999:362]。たとえば、「著者索引凡例」だと次のように記されている。記録をとった人は「[記] 記録」、協力した人は「[協] 協力」、手話通訳者なら「[手話通訳] 手話通訳」と記された[思想の科学研究会・索引の会 1999:363]。雑誌とは書き手や読み手、編集者だけで成立するわけではない。書き手だけを意識してしまうと誌面には表れにくい人びとによっても成立しているのである。1980年代の地方集会は、「雑誌の表面からは見えにくいこの集団の「結衆」の構造」が表れていたとされるように、雑誌『思想の科学』では見えてこない人びとの存在をより自覚していくことであった。そうした自覚が『総索引 1946-1996』というメディアを作らせた一因でもあったのだろう。「ひとつの運動が一人の創始者の名前によってのみ記録されることを避けるための方法」は、『総索引 1946-1996』によって結実されていったのである。

『総索引 1946-1996』の「形式」は、固定的な『思想の科学』を描こうとすることからも距離をとっていた。安田は総索引作成において「岩波（書店）じゃないんだ」「整合性がびっちりしたものじゃなくても構わない」と述べていたという⁵⁾。これは、「正しい」『思想の科学』を作ろうとすることではなく、「そのときの自分を表象する切実な定点（の一つ）」としての「思想の科学」を描こうとしたことでもあった。たとえば、事項索引では、「子ども」という事項だけではなく、「子ども幻想」、「子ども集団」、「子どもの本」、「子ども文化」なども事項として付けられている〔思想の科学研究会・索引の会 1999:115-117〕。「整合性」を重視するなら、すべてを「子ども」という事項に統一するほうがまとまりがあるだろう。だが、索引作りにおける各々の「思想の科学」をみようとしたからこそ、人びとの「定点」を捉えることができるものになっていったのである。

『総索引 1946-1996』には安田の「民間学」の実践も関わっている。安田は、「思想の科学」という集団は多くの人びとにとって「そのときの自分を表象する切実な定点（の一つ）」であったとし、「無数に広がった接点の集合のなか」に「思想の科学」の集団の輪郭が見え、「放射線状」に飛び散りながら「星座のかたちを表象」と述べている〔安田 2006:9〕。安田が『総索引 1946-1996』を、『思想の科学』に留まらず「思想の科学」において描こうとしたことは、鶴見俊輔が意図した『思想の科学』という雑誌の『総索引』の枠組みに収まらないようにすることでもあった。それは、鶴見俊輔という存在を「接点」のひとつとして捉えることであり、「形成された「学」の背後には民衆のたくさんの努力が蓄積されていること」を示すという安田の「民間学」の実践であった。

この「民間学」の実践は安田の生活史の方法と結びついたものであった。安田の生活史は鶴見俊輔の思想から影響を受けたものでもあった。

鶴見の生活史の方法として、第一に「大きな事件と小さな人とのくみあわせ」、第二に「過去の眼・未来の眼・同時代の眼」、第三に「余白のある歴史」があった〔鶴見 1961:343-345〕。これは、1961年の『日本の百年1 新しい開国』の鶴見の「解説」で書かれたものである。第一の「大きな事件と小さな人とのくみあわせ」は、「それぞれの時代の小さな人が同時代を生きた根拠(生きがい)をしり、それぞれの人の内側から同時代を見よう」とすることである〔鶴見 1961:244〕。第二の「過去の眼・未来の眼・同時代の眼」は、同時代の平面を組み合わせることで「開国以来百年の立方体」構成しようとしたことである〔鶴見 1961:244-245〕。第三の「余白のある歴史」は、「法則的にかっちりとかまれた歴史の本」とは違い「ゆるい構図」にすることで、読者が「自分のその時にもった同時代体験」をさらに付け加えることができるようにしたことである〔鶴見 1961:

244-245]。この鶴見の方法を、安田は、生活史の「方法」として多くの視点を提起していると評価し、自身も取り入れていったのである[安田 2020:7]。

さらに、鶴見の「出会い」に対する思想から、安田は自身の生活史の方法を確立させていく。鶴見は「出会い」に関して、「その人の中で、どんな人々がどのようにたがいに会ったか」、そして「その人をとうして、どんな人々がどのようにおたがいに会うことができたか」を考えることの重要性を指摘している[鶴見 2022b:184]。こうした鶴見の思想に影響を受け、安田は生活史の方法として「コミュニケーション的生活史」を打ち立てている。それは『自分とは何か』という問いを基底におき、状況のなかでの多様な他者との多層的なつながりを通して形成される『生活史』であるとし、『個人』の『生活史』を基底におきつつ、社会のなかでの多様な他者とのつきあいを通して形成されるコミュニケーション的生活史という位相であると述べる。[安田 2020:11]。安田は、生活史として「つながり」、「つきあい」という視点を重視するのである。

この「つながり」、「つきあい」の視点は、『総索引 1946-1996』にも表れている。ただ執筆者や事項を羅列するのではなく、「思想の科学」に関わった人びとも対象とすることで、多層な「つながり」、「つきあい」を描こうとした。そして、それは『総索引 1946-1996』の内容に関してだけではなく、後述する「総索引出版記念シンポジウム」の開催や『源流』のように、『総索引 1946-1996』から、新たな「つながり」、「つきあい」を形成していくことを企図するとともに、人びとが「つながり」、「つきあい」に気づいていくことを促すことでもあった。ここで、重要なことは、安田が鶴見の思想をただ受容するだけではなく、それを受容し発展させていき、『総索引 1946-1996』という形で結実されたということであった。

『総索引 1946-1996』の方向性は、総索引作成に関わったさまざまな人びとの思想を織り込みながら形成されていったものであった。事項索引の作り方は、ある論文や記事の担当の報告者がその内容を報告し、それについて参加者が意見をいい、1周したら担当者を変えて報告をしていく形式がとられ、それによってキーワードを積み上げていった⁶⁾。各々の観点から事項が作られていったのであった。『戦後「啓蒙」思想の遺したもの』に関わり、索引の会にも参加していた古田佳之は『総索引 1946-1996』について次のように述べている。

さっきの挿絵の話とかありましたけど、普通だったら載せないものも載せようとしたとか、さっき言ったように、自分(古田)が催し物のページを見て、読者の会(注:思想の科学研究会のサークル)に来たから、そういう催し物のページとか、そういうものも載せたいという、壮大な野望

があったんだけど、なるべくそういうものもというふうには思った記憶があります⁷⁾。

6年近くの歳月をかけて作成された『総索引 1946-1996』は、互いの観点を共有していくからこそ、普通では掲載されないものも掲載していくことができた。非会員として関わった高原泉は、「今までの読者」のためではなく「これからの読者」のために役立つものにしたいという意識があり、それで編集を困らせたとも述べている[高原 2003:17]。多種多様な思想が絡み合いながら索引の方向性は形成されていった。

3 『源流』、『ダイジェスト』、『読む人・書く人・編集する人』の連繋

(1)『源流』

では、『総索引 1946-1996』によって何が生み出されていったのだろうか。『総索引 1946-1996』の作成によって、生み出されたものとして『源流』をあげることができる。『総索引 1946-1996』からどのように『源流』の作成へと繋がっていったのかを確認したい。『源流』は、『総索引 1946-1996』からさらに力を引き出したいと鶴見俊輔が考え、少人数の同じメンバー「五十年史の会」によるシンポジウムを重ね、そのシンポジウムの報告をまとめたものである[鶴見 2005:1]。「五十年史の会」は鶴見俊輔・天野正子・石井紀子・加藤典洋・黒川創・鈴木正・安田常雄・山領健二がメンバーで、基本的に思想の科学研究会の会員で構成されていた。

『源流』における鶴見の意図は『総索引 1946-1996』に私的な「注釈」を加えていくことであった[鶴見 2005:1]。『源流』の作成に関わった山領健二は、『総索引 1946-1996』を出して終わりになり雑誌は止まったという終わり方ではなく、雑誌が終わったら、『総索引 1946-1996』が作られ、それによって『思想の科学』の研究ができると鶴見は考えていたと語っている⁸⁾。

『総索引 1946-1996』というメディアができたことによって、その歴史を捉え直すことができるようになったのである。ここで重要なことは、『総索引 1946-1996』が、乖離しつつあった雑誌『思想の科学』と思想の科学研究会をふたたび結びつける機能を持っていたことである。『思想の科学』という雑誌の総索引作成にあたり思想の科学研究会員が集うことになった。また、そのようにして作られた『総索引 1946-1996』に、思想の科学研究会員が「注釈」をつけることで『思想の科学』の歴史を思想の科学研究会が考えていく機会となった。

『総索引 1946-1996』から『源流』への流れは、たとえば『朝日新聞』が「戦後50年 明日を求めて」という連載企画社説を掲げたように、当時の社会風潮で

あった「戦後50年」などの「戦後〇〇年」を相対化する試みでもあった。『総索引 1946-1996』は「戦後思想文化運動の記録」である同時に、「思想運動としての「思想の科学」に関わったすべての人の記録」であり、「独自の思想集団の軌跡」を通して「戦後日本」を解説する素材を提供していた[安田 2005:8]。2005年に刊行された『源流』も「思想の科学六〇年」の「思想の科学」自身による「自己像」であり、『思想の科学』に接した「多くの人々（他者）」の「同時代の経験」が「積み重ね」られていくことで、「戦後六〇年」の「振幅」を広げ、その重層性を厚くするものでもあった[安田 2005:9]。これは「戦後日本」や「戦後〇〇年」などがひとつの認識で固定化されていくことに対して、多様な人びとの経験を積み重ねることで、それを固定化せずに「振幅」を広げていこうとするものであった。多様な人びとの経験を「積み重ね」ながら「思想の科学」が自己言及をすることは、「知識人」という一つの軸で語ることが強固にすることではなく、多様な人びとの経験という多くの軸を散らすことで、「思想の科学」がみずからを再定義していくことであった。

『総索引 1946-1996』から歴史を掘り起こしていくことは、2000年から2003年までに計5回開催された「総索引出版記念シンポジウム」でもみることができる。これは、『総索引 1946-1996』を読みながら「『思想の科学』と自分の関わり」を語ってもらう企画であった[安田 2006:9-12]。第1回が焼津集会、第3回が京都集会で、地方集会としても開催されていた。『総索引 1946-1996』を読む「総索引出版記念シンポジウム」によって、「自分」と「思想の科学」、「地方」と「思想の科学」についても志向する場が醸成されていった。

このように、『総索引 1946-1996』は、『思想の科学』の歴史へ繋いでいくことで、『思想の科学』と思想の科学研究会を、そこには「自分」や「地方」という観点を含みながら、ふたたび「思想の科学」として接合していくことを促したのである。

(2)『ダイジェスト』、『読む人・書く人・編集する人』

三部作の最後の『ダイジェスト』は、『思想の科学』に掲載されていた論文や記事などを選んで抄録にしたものである。『総索引 1946-1996』から任意に選ばれた論文・エッセイの要約をつけたうえで「読者としての感想を記述する形式」をとっている[安田 2010a:3]。

『ダイジェスト』を編集した石井紀子によれば、最初に会員の声を聞くために全会員に『思想の科学』50年のなかで「心に残っている論文、エッセイ、雑文」について葉書アンケートを実施し、その回答を核として、「五十年史の会」のメンバーが約1000件を目標に収録すべき論文や記事を選び執筆者も決めていく作業をおこなった[石井 2009:461]。最終的に「当初の目標の倍」の約2000

件の論文・記事が上がり、「学術的論文」だけではなく「記録、伝記、エッセイ、座談・対談、書評、雑文」など「多様なもの」が含まれた[石井 2009: 461]。

『ダイジェスト』は「思想の科学」においてどのような意味を持ったのだろうか。それは、さまざまな人びとを関わることで、「思想の科学」に新たな営為を生み出そうとしていくことであった。加藤典洋は『ダイジェスト』に各論文をそのまま選んで掲載しなかった理由について、「鶴見さんは、そういう簡単なことはしたくなかったようだ。各要約のダイジェストの形にすることで、いろんな人が動きはじめる」と述べたという[福田 2010: 254]。『総索引 1946-1996』が『思想の科学』と思想の科学研究会をふたたび「思想の科学」として繋いでいき、『ダイジェスト』はさらに「思想の科学」に人びとを関わらせていくものであった。

また、三部作の出版を記念して三部作出版記念シンポジウムが開催された。そのシンポジウムの内容や『思想の科学』の歴史をまとめた、『読む人・書く人・編集する人』が2010年に刊行されている。

『読む人・書く人・編集する人』の出版は、そうした「思想の科学」の流れから、新たに人びとが関わっていったことを表すものであった。実際にこの本の編集の中心メンバーは1960年代以降に出生した人びとであり、現在の思想の科学研究会の運営を担っている人物も関わっている。三部作からシンポジウム、『読む人・書く人・編集する人』の出版は、「読者、参加者を含むひとつの運動」であったのである[福田 2010: 254]。三部作刊行からの「思想の科学」は、『思想の科学』と思想の科学研究会が再接続されただけではなく、『思想の科学』休刊によって閉じられていくように思われた「思想の科学」を拡張していくものでもあったのである。

結論

本稿は「思想の科学」がみずからの戦後思想を捉え直すことの意味を明らかにするために、『総索引 1946-1996』の作成過程と『総索引 1946-1996』によりな生成されたのかを分析してきた。

第一に、『総索引 1946-1996』によって戦後思想を捉えていくことは、1980年代に距離を置きつつあった『思想の科学』と思想の科学研究会を「思想の科学」としてふたたび繋げていくことを意味した。『総索引 1946-1996』は内容自体は基本的に『思想の科学』に関してであるが、その『思想の科学』の内容をまとめていくという作業は、『思想の科学』と思想の科学研究会を再接合していくものであった。そして、『総索引 1946-1996』によって、『思想の科学』の歴史を思想の科学研究会が振り返ることができるようになったことで『源流』も生み出されていった。そして、そうした歴史から新たな活動を起こしていく

ものとして『ダイジェスト』があった。『総索引 1946-1996』・『源流』・『ダイジェスト』の三部作記念出版シンポジウムは、ただの記念というだけではなく、『思想の科学』休刊以後も思想の科学研究会が新しい担い手によって支えられていることでもあり、『読む人・書く人・編集する人』の出版自体が「読者、参加者を含むひとつの運動」であった。

第二に、『総索引 1946-1996』は著名な書き手だけではなく関わった人びとの名前を配置することで、書き手という面だけでは誌面に表れにくかった人びとの存在を浮かび上がらせようとした。これには、索引というメディアの、有名無名に関わらず名前を羅列するという「形式」が影響していた。また、『総索引 1946-1996』作成の中心であった安田常雄における、1980年代の「民間学」や地方集会の思想も関係していたのである。『総索引 1946-1996』は、『思想の科学』が書き手―読み手の二者関係で論じられることを崩そうとしたものでもあったのである。

〔謝辞〕

『源流』に関する貴重なお話をしてくださった山領健二氏、『総索引 1946-1996』についてご教授いただいた古田佳之氏、1980年代の雑誌と研究会の関係性や五人の会に関してご教授いただいた本間伸一郎氏、「思想の科学」や鶴見俊輔の思想についてご教授いただいた集団の会のみなさまに、この場を借りて心よりお礼申し上げます。

また、山領健二氏のお話の機会を作り同席していただいた山本邦夫氏、古田佳之氏、本間伸一郎氏に改めて感謝申し上げます。

注

- 1) 「天皇制問題特集号」廃棄事件に関しては根津 (2013) や横尾 (2014) に詳しい。
- 2) 本間 (2024) によれば、市民学校とは、自主刊行直後から始まった 1963～1966 年までに開催された、思想の科学研究会主催の学校のことである。
- 3) 1980 年代の思想の科学研究会の方向性に関しては本間伸一郎氏提供論考から多くの啓発を受けた。また、『思想の科学研究会 年報』4 号に掲載された「コミュニケーションの未来を、デザインする——太田幸夫インタビュー」(聞き手：本間伸一郎) や、本間伸一郎氏による解説も参考になった。
- 4) 鹿野の思想については、赤澤史朗・北河賢三・黒川みどり・戸邊秀明編『触発する歴史学——鹿野思想史と向きあう』(2017 年、日本経済評論社) などが詳しい。
- 5) 2024 年 8 月 18 日古田佳之氏インタビュー。
- 6) 2024 年 8 月 18 日古田佳之氏インタビュー。
- 7) 2024 年 8 月 18 日古田佳之氏インタビュー。
- 8) 2021 年 7 月 1 日山領健二氏インタビュー。

参考文献

- 赤澤史朗・北河賢三・黒川みどり・戸邊秀明編, 2017, 『触発する歴史学——鹿野思想史と向きあう』日本経済評論社.
- Duncan, Dennis, 2021, Index, A History of the, Penguin, London (=2023『索引 ーの歴史——書物史を変えた大発明』小野木明恵訳 光文社).
- 福田賢治, 2010, 「編集後記」記念シンポジウムを記録する会編『読む人・書く人・編集する人——『思想の科学』五〇年と、それから』思想の科学社, p.254.
- 後藤宏行, 1982, 「京都での " 拡大評議員会 " 開催のお知らせとよびかけ」『思想の科学会報』105, p.27.
- , 1983, 「問題点への事務局長見解」『思想の科学会報』107, pp.14-15.
- 本間伸一郎, 2019, 「基調報告」『思想の科学研究会年報』創刊号, pp.35-41.
- , 2020, 「『思想の科学研究会 年報』創刊について」『季論 21』48, pp.197-209.
- 本間伸一郎氏提供論考.
- 本間伸一郎, 2022, 「特集 壁を越えるために 解説とあとがき——思想の科学研究会の流れの中でとらえれば」『思想の科学研究会 年報』4, pp.116.
- , 2024, 「市民学校について」『思想の科学研究会 年報』5, pp.8-20.
- 稲葉誠也, 1967, 「雑誌総索引の作製について——思想関係の雑誌の場合」『図書館学会年報』14(2), pp55-58.
- , 1968, 「総索引を作りながら考えたこと」『思想の科学』第5次 81, pp.62-65.
- 伊藤益臣, 1972, 「名古屋市民学校の記録」『思想の科学』第6次 2, pp.138-153.
- , 2002, 「編集後記」『思想の科学会報』153, p.48.
- 出原政雄編, 2015, 『戦後日本思想と知識人の役割』法律文化社.
- 石井紀子, 2009, 「ダイジェストの編集を終えて」『思想の科学』五十年史の会『『思想の科学』ダイジェスト 1946-1996』思想の科学社, pp.460-463.
- 鹿野政直, 1983, 『近代日本の民間学』岩波書店.
- , 1987, 「『近代日本の民間学』を書いて」『思想の科学』第7次 96, pp.9-18.
- 北河賢三・黒川みどり編, 2020, 『戦中・戦後の経験と戦後思想——一九三〇—一九六〇年代』現代史料出版.
- 松井隆志, 2024, 『流されながら抵抗する社会運動——鶴見俊輔『日常的思想の可能性』を読み直す』現代書館.
- 松本礼二, 1994, 「思想の言葉」『思想』844, pp.1-4.
- 三宅芳夫, 2019, 『ファシズムと冷戦のはざままで——戦後思想の胎動と形成 1930-1960』東京大学出版会.
- , 2024, 『世界史の中の戦後思想——自由主義・民主主義・社会主義』地平社.
- 道場親信, 2005, 「書評『『思想の科学』五十年 源流から未来へ』」『週刊読書人』2612, p.2.

- , 2007, 「新しいサークルの立ち上げについて」『思想の科学会報』165, pp.12-14.
- , 2010, 『『思想の科学 総索引』から見えるサークルの動き——「サークル戦後史研究会」の活動から』記念シンポジウムを記録する会『読む人・書く人・編集する人——『思想の科学』50年と、それから』思想の科学社, pp.134-143.
- 森秀人, 1982, 『実録 我が草莽伝——知識人たちの終宴』東京白川書院.
- 那波泰輔, 2021a, 「民間にとって「民間」とはなにか——「民間学」と「民間アカデミズム」に着目して」『思想の科学研究会 年報』2, pp.16-21.
- , 2021b, 「思想の科学にとっての「民間学」——安田常雄「と」思想の科学」『活字以前』65, pp.55-58.
- 根津朝彦, 2013, 『戦後『中央公論』と「風流夢譚」事件——「論壇」・編集者の思想史』日本経済評論社.
- 小熊英二, 2002, 『〈民主〉と〈愛国〉——戦後日本のナショナリズムと公共性』新曜社.
- 大井赤亥・大園誠・神子島健・和田悠編, 2015, 『戦後思想の再審判——丸山眞男から柄谷行人まで』法律文化社.
- 大野光明・小杉亮子・松井隆志, 2021, 「メディアがひらく運動史」『社会運動史研究』3, pp.6-7.
- 大野力, 1972, 「自主刊行・10年の歩み」思想の科学研究会名古屋グループ鈴木正・稲葉誠也編, 『『思想の科学』総索引(1946～1972.3)』別冊増刊 214, pp.163-174.
- 太田幸夫・聞き手 本間神一郎, 2022, 「コミュニケーションの未来を、デザインする——太田幸夫インタビュー」『思想の科学研究会 年報』4, pp.106-115.
- 佐藤忠男, 1962, 「雑誌のこと」『思想の科学会報』37, pp.93-94.
- 渋谷定輔, 1982, 「多様性の中の共通性——『思想の科学会報』復刻版刊行にあたって」思想の科学研究会『思想の科学会報 第1巻』柏書房, pp.3-5.
- 『思想の科学』五十年史の会, 2009, 『『思想の科学』ダイジェスト——1946-1996』思想の科学社.
- 思想の科学研究会, 1966, 「思想の科学の二十年」『思想の科学』第5次 50, pp.121-151.
- , [1969]1999, 「創刊のことば」思想の科学研究会・索引の会『思想の科学総索引 1946-1996』思想の科学社, 728.
- 思想の科学研究会編, 2006, 『『思想の科学』50年の回想——地域と経験をつなぐ』出版ニュース社.
- 思想の科学研究会・索引の会編, 1999, 『思想の科学総索引——1946-1996』思想の科学社.
- 鈴木正, 1967, 「あとがき」思想の科学研究会名古屋グループ 鈴木正・稲葉誠也編『『思想の科学』総索引(1946～1966)』別冊増刊 106, p.119.
- , 1972a, 「名古屋グループの十年」『思想の科学』第5次 128, p.104.
- , 1972b, 「新版にあたって」思想の科学研究会名古屋グループ 鈴木正・稲葉誠也編『『思想の科学』総索引(1946～1972.3)』別冊増刊 214, pp.5-10.
- 戸邊秀明, 1998, 「鹿野政直・鶴見俊輔・中山茂(編)『民間学事典』をめぐって」『民衆史研究』56, pp.59-67.

- , 2006, 「思想の科学研究会編『共同研究 転向』」岩崎稔・上野千鶴子・成田龍一編『戦後思想の名著 50』平凡社, pp.170-180.
- 高原泉, 2003, 「素人の効用——思想の科学「索引の会」に参加して」『思想の科学会報』156, pp.17-19.
- 高草木光一, 2023, 『鶴見俊輔 混沌の哲学——アカデミズムを越えて』岩波書店.
- 鶴見俊輔, 1961, 「解説」鶴見俊輔ほか編『日本の百年 1 新しい開国: 1952-60』筑摩書房, pp.343-347.
- , 2005, 「はじめに」鶴見俊輔編『源流から未来へ——『思想の科学』五十年』思想の科学社, pp.1-3.
- , 2022a, 『期待と回想』筑摩書房.
- , 2022b, 『日本の地下水——ちいさなメディアから』編集グループ SURE.
- 鶴見俊輔編, 2005, 『源流から未来へ——『思想の科学』五十年』思想の科学社.
- 鶴見俊輔・佐高信, 1997a, 「『民間学』のすすめ (上)」『三省堂 ぶっくれっと』125, pp.4-15.
- , 1997b, 「『民間学』のすすめ (下)」『三省堂 ぶっくれっと』126, pp.12-25.
- 鶴見良行・大野力・渡辺喜蔵・上野博正・原芳男・後藤宏行, 1980, 「座談会 思想の科学の運動の提示したもの、提示するもの」『思想の科学』第6次 116, pp.4-18.
- 寺田征也, 2024, 「『社会学』としての鶴見俊輔——「記号の社会学」の構想と意味の多元性」晃洋書房.
- 安田常雄, 1981, 『出会いの思想史＝渋谷定輔論——『農民哀史』の世界』勁草書房.
- , 1985, 「『民間学』の読み解きのかなたに」『思想の科学会報』114, pp.4-17.
- , 1987a, 「民間学の意味するもの——鹿野政直『近代日本の民間学』を読んで」『思想の科学』第7次 96, pp.27-38.
- , 1987b, 「編集後記」『思想の科学』第7次 96, p.132.
- , 1990, 「この会の生まれるまで」『思想の科学研究会』第7次 129, pp.45-47.
- , 1992, 「あとがき」安田常雄・天野正子編, 1992, 『戦後「啓蒙」思想の遺したもの——『思想の科学』・『芽』別巻』久山社, pp.243-245.
- , 1999, 「はしがき」思想の科学研究会・索引の会『思想の科学総索引 1946-1996』思想の科学社, p.1.
- , 2000, 「解説・思想史の発想と方法」安田常雄・佐藤能丸編『展望日本歴史 24 思想史の発想と方法』東京堂出版, pp.1-12.
- , 2005, 「『思想の科学』と戦後精神のゆくえ——戦後六〇年の「思想の科学」」『出版ニュース』2047, pp.6-9.
- , 2006, 「幾度目かの曲り角に立って」思想の科学研究会編『『思想の科学』50年の回想——地域と経験をつなぐ』出版ニュース社, pp.6-22.
- , 2010a, 「はじめに」記念シンポジウムを記録する会編『読む人・書く人・編集する人——『思想の科学』50年と、それから』思想の科学社, pp.3-4.

- , 2010b, 「アンケート」記念シンポジウムを記録する会編『読む人・書く人・編集する人——『思想の科学』50年と、それから』思想の科学社, pp.126-127.
- , 2020, 「再考・方法としての生活史研究——その断片と回想」『昭和のくらし研究』18, pp.5-18.
- 安田常雄・天野正子編, 1992, 『戦後「啓蒙」思想の遺したもの——『思想の科学』・『芽』別巻』久山社.
- 横尾夏織, 2014, 「『思想の科学』の思想およびその方法」早稲田大学大学院博士論文.
- 和田悠, 2005, 「鶴見俊輔と『思想の科学』の1950年代——戦後啓蒙の思想的転回に関する一考察」有末賢・関根政美編『戦後日本の社会と市民意識』慶應義塾大学出版会, pp.231-262.
- 「良い選択を読者と共に「戦後50年 明日を求めて」」『朝日新聞』1994年5月2日朝刊.
- 『思想の科学会報』2001年, 151号.
- 『思想の科学会報』2002年, 153号.
- 『思想の科学会報』2010年, 170号.

Abstract

This paper analyzes the meaning of the attempt by “The Science of Thought” to capture its own postwar thought, using the “General Index 1946-1996” as a reference. From the perspective of the history of social movements, we examined the “The Science of Thought” movement by dealing with the medium of “General Index 1946-1996”. The 1980s was a period when “The Science of Thought” and the Science of Thought Research Group were growing apart, and the Science of Thought Research Group sought to find its own identity as a research group. The 1990s ‘General Index 1946-1996’ had the function of bringing together the people involved by listing their names in equal measure, and by enabling the Society for the Study of Thought Science to refer to the history of ‘Thought Science’, it also served to re-connect ‘Thought Science’ and the Society for the Study of Thought Science. Then, the “General Index 1946-1996”, “Genryu”, “Digest”, and “Yomu Hito, Kaku Hito, Henshu Suru Hito” were created, and a movement to capture post-war thought began to emerge.

Keywords: The Science of Thought, Postwar Thought, Media

なば たいすけ (成蹊大学)